

卒論、ゼミ論、レポートのための  
言語研究論文作成ワークブック[第2版]

上智大学国際言語情報研究所 所内共同研究

上智大学外国語学部版 論文の書き方 執筆班



## はじめに

レポート、小論文、卒業論文等々、大学では実に多くの文章を書かなければなりません。しかも、単に感想を述べるのではなく、データを集めて分析したり、これまでに行われてきた調査の結果をまとめたり、議論を批判的に検討したりした結果を、論理的に一貫した構成のしっかりした文章が求められます。それは小説を書くのでもなく、思いのままに自分のスタイルで物語を展開するわけでもありません。特定の読み手とその読み手の属する共同体を想定して、そこで定められた規則に従うことが必要となります。文を構成するための文法があるように、論文の文章構成にも「文法」があります。その文法に従うことによって研究の成果を伝えることができます。

皆さんに求められる課題も例外ではありません。それぞれの専門分野には各々規定された論文の文法があります。論旨の構成だけではなく、文献の引用の仕方、参考文献の記載の仕方、注釈のつけ方、図表の使い方、題目の立て方、見出しの付け方などについても規定があります。本書は本学で言語研究を専攻する学生のための補助教材として作成しました。

外国語学部ではこれまでに主旨を同じくする冊子が出版されています。しかしながら、多くは地域研究専攻向けであり、言語研究向けではありませんでした。海外も含めて沢山の参考書が出版されていますが、私たちの学部のように様々な言語を対象とする研究に役立つものはほとんどありません。本書は様々な言語の研究を想定し、理論、社会、心理等多様な言語研究に対応できるようなマニュアルを作成しました。今回は 2020 年に発行した改訂版にさらに練習問題を加え、皆さんが本書をワークブックとして使っていただけるようにしました。

更に充実した内容にする為に忌憚のないコメントをお待ちしています。

本書の出版は本学の国際言語情報研究所の 2021 年度所内共同研究補助金（現在継続中）で可能となったものです。

2022（令和 4 年）3 月 1 日

執筆者 一同

## 目次

はじめに	1
本冊子の目的と構成	4
論文作成のプロセス・フローチャート	5
A : 論文のテーマ	6
課題 1 : テーマになりそうな事項を書き出してみる	7
課題 2 : テーマとの関連事項を関係付ける	8
課題 3 : 研究課題と必要な資料	9
B : 資料の収集と分析・ノート作成	10
1. 文献を収集する	10
2. 文献を整理する	11
課題 4.1 : キーワードを書き出してみる	12
課題 4.2 : キーワードで検索	13
課題 5 : 先行研究からの抜粋	14
3. 文献以外のデータ収集	15
a. コーパス	15
b. 面接 (インタビュー)	18
課題 6 : 面接の練習	19
c. 質問紙 (アンケート)	20
課題 7 : 質問紙の作成練習	21
d. 人を対象とした調査の倫理について	22
C : アウトラインの作成と肉付け	23
1. 論文の構成	23
2. 論文のスタイル	24
論文の構成例	25
課題 8 : アウトラインの作成練習	27

D : 論文執筆と注の作成	31
1. 最初から最後まで書き続ける	31
2. 文、パラグラフ、節、章の関係	31
3. 本編中引用文献の記載	32
課題 9 : 引用の練習	34
4. 注について	35
5. 図表について	35
課題 10 : 図と表の作成練習	37
E : 目次と文献目録の作成	38
1. 文献目録はなぜ必要か	38
2. 文献目録の例	39
課題 11 : 目次の作成練習	54
課題 12 : 文献目録の作成練習	55
F : 推敲と提出	56
1. 形式の確認事項	56
2. 内容の確認事項	56
課題 13: 推敲の準備	57
研究の倫理	58
1. 剽窃 (plagiarism)	58
課題 14: 剽窃について意識化する	59
2. プライバシーの侵害	60
課題 15: プライバシーの侵害について意識化する	60
要点のまとめ	61
参考文献	63

## 本冊子の目的と構成

本冊子は、主に卒業論文を念頭において、論文作成の手引きとなることをめざしています。外国語学部ではさまざまな分野で卒業論文を書くことができますが、本冊子では、主に、学科を横断して取りくむ学生が多い言語研究分野を例としてとりあげています。ただし論文の基本は他の分野でも変わらないので、分野にかかわらず参考になることをめざしました。また外国語学部は、言語圏によって参考文献の書き方などが異なるので、共通する部分以外は、言語ごとに個別に付録をつけています。

なお、卒業論文のほかに、卒業研究という、より柔軟な形で研究成果をまとめることも可能です。たとえば翻訳やウェブサイト、映像などの作成が考えられます。その際は、研究成果物の他、その成果物に対する解説や解題を文書化して提出することになります。詳しくは履修要覧で確認してください。

この冊子には、論文作成の様々な過程におけるアドバイスや注意事項をフローチャートとして図式化し A から F の記号に沿ってまとめました。論文を書き始める前の計画、書いている最中に適宜振り返りながら進捗状況確認等にお役立てください。



## A 論文のテーマ

レポート・論文を作成するときには、以下の諸点に注意を払って自分のテーマを決定します。

- テーマは早い段階で決定するのが理想です。資料にあたっていくと当初のテーマは修正せざるを得なくなるかもしれません。従って最初は「仮の」テーマで研究をスタートさせて構いません。文献を読み、資料に目を通し、データを集め、分析していくうちに徐々にテーマが明確になっていくのがむしろ普通ですから、仮であってもテーマの決定は、早いほどよいといえるでしょう。
- 自分の問題意識を絞り込みます。研究を進めていくと、関連する事項、問題が増えてしまつて、整理するのが難しくなっていくことがあります。量が増大すると無秩序を生み出すというエントロピーの法則が示す通り、情報は多ければよいわけではなく、多すぎると把握ができなくなります。したがって、研究を開始したら、できるだけ問題を限定し、問題意識を鮮明にしておくことが重要になってきます。
- 専門の授業や演習で学んだことだけに捕らわれずに、全学共通科目やコース導入科目、その他の科目、読書などで自分が習得した知識を幅広く動員する努力をしましょう。
- 一度決めたテーマは徹底的に追求しますが、資料収集などで限界がはっきりした場合には、思い切ってやり直す勇気も必要となります。データが思うように集まらなかったり、アンケートの集計結果が思うようにまとまらなかったりして、このような判断をしなければならない場合もあるでしょう。その意味でも、やり直す場合に備えて、作業は早めに開始しておく必要があります。

「テーマを絞り込め」というアドバイスを受けることが多いと思います。確かにその通りで、テーマは小さいければ小さいほどよい、つまり限られた時間と環境の中で対処できるということが良いテーマの条件となります。しかし、だからといって十分に明確なテーマが定まるのをまっけてはいつになっても研究ができず、論文は書けずということにもなりかねません。すでに述べましたが、ある程度のテーマが決まったら資料を探し、そして探しながら徐々に明確にする、そうしているうちにテーマが明確になったり、あるいは修正することが必要であることに気づくことがむしろ普通です。つまり、論文というのは一直線に進むのではなく、円錐形を描きながら行きつ戻りつしながら徐々に完成に向かっていくようにして出来上がるものと考えべきでしょう。

また、良いテーマには、自分にとって魅力的であり、積極的な興味関心を感じる、調査可能、つまりある一定の限られた資源と時間内でデータや資料が収集可能である、そのテーマにある程度の予備知識を持っている、研究の成果が有益である等々の特徴があります。これらのテーマを特定するためには、研究課題を疑問文（research questions）にすることが大切です。たとえば、外国語はどのようにすれば効率よく習得できるのか、外国語習得に効果的な教材はどのようなものか、外国語習得においてなぜ個人差があるのか、リスニング力を高めるためにはどうすればよいのか等々、疑問文を作っているうちに徐々に焦点を絞りこむことができるでしょう。



課題 1 : テーマを決める手がかりとして、関心事項を思いつく限りたくさん書いてみよう。便宜上番号を記したが、必ずしも整然と分ける必要はない。

1.

2.

3.

4.

5.

6.

7.

8.

9.

10.

課題 2 : 課題 1 で書いた関心事項からテーマをしぼっていき。中心となりそうな事柄、間接的に関係する事柄、あまり関係のなさそうな事柄を仕分けて、分類図式化してみよう。

課題 3 : テーマは文献を調べたり、データを集めたりといった具体的な作業をしながら徐々に明確になってくるものだ。課題 2 にまとめた暫定的なテーマを疑問文にして、「研究課題 research questions」にしてみよう。さらに、次の「B : 資料の収集と分析」の準備として、必要となりそうな資料、情報、データを書き出してみよう。最初に例を挙げておいた。

研究課題 (Research question)	必要な情報、データ、収集方法
<p>例 : 教師が教室で使う言語—ティーチャー・トークはどのような特徴をもっているか。</p>	<p>授業観察。授業中の録音。文字起し。談話分析。</p>

## B 資料の収集と分析・ノート作成

ある程度明確なテーマが特定できたら、次はそのテーマに関する資料を収集することになります。ここで「資料」というのは、学術書や学術雑誌に掲載されている学術論文などの参考文献、および言語研究に用いる言語関連のデータを指しますが、ではどうやってその収集を進めていけばいいのでしょうか。以下にそのプロセスを紹介します。

### 1. 文献を収集する

まずは設定したテーマに関連した語句を書き出してみる。それぞれを関連付けたり、比較的重要な語句やそうでない語句を仕分けしながら、特に重要な概念を表すキーワードをいくつか絞り込む。さらに絞ったキーワードで検索し、基本文献・関連文献を見つける。

#### 単行本

もっとも身近にある本学図書館の OPAC（上智大学図書館所蔵資料検索）からキーワード検索を行い、関係のありそうな文献をピックアップする。そして配架先に行き、実物に目を通すのが望ましい。本文を読んでみるのと同時に、その文献に掲載されている参考文献リストを大いに活用することが重要である。その中から自分のテーマの基本文献となっているものと、関連文献で特に自分のテーマの参考になりそうなものを特定する。入手すべき文献がいくつか見つければ、それらを手掛かりとして、後は各文献に掲載されている参考文献リストを順次参照することで、自分のテーマについて読むべき文献に漏れのないようにしていく。本学図書館に所蔵のない単行本は、CiNii Books（他大学図書館所蔵資料検索）や Webcat Plus（他大学図書館・国立国会図書館等所蔵資料検索）、NDL-OPAC（国立国会図書館所蔵資料検索）で所蔵先を確認し、図書館のリファレンスカウンターを通して、取り寄せや必要なページの文献複写を依頼する。

#### 雑誌論文

一方、単行本ではなく論文としてどのようなものが発表されているかを知るには、e-Resources Access Page（上智大学図書館電子ジャーナル検索）、CiNii Articles（日本語雑誌記事・論文検索）、J-STAGE（国内科学技術電子ジャーナル記事検索）、EBSCOhost（外国語雑誌記事・論文検索）、Google Scholar、またたとえば言語学系では Linguistics and Language Behavior Abstracts（言語学と言語科学に関する文献の抄録・索引データベース）、「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」など、分野ごとの専門デー

データベースでキーワード検索を行うことができる。画面上で論文を閲覧したり、PDF ファイルとしてダウンロードできる場合もあるが、そうでない場合は、書誌情報（著者名、論文名、掲載雑誌名、出版年、巻号、掲載ページなど）を確認し、その掲載雑誌を OPAC ほかで検索することになる。また、学会によっては、そのサイトから学会誌のバックナンバーの目次や本文を閲覧できるようにしているものもあるので活用しよう。言語系の主な諸学会で構成されている「言語系学会連合」のサイトからは、37（20212 月現在）の加盟学会の各サイトにリンクがはられている。本学には言語研究を専門とする国際言語情報研究所（SOLIFIC）など、さまざまな研究所があり、国内外の主要な専門誌の閲覧が可能である。

## 2. 文献を整理する

文献を読む際には、レポート・論文の執筆時に参照できるように、情報を整理しつつ進めていくことが重要である。記録する媒体は、ノート、カード、パソコンのソフトなどから自分に合ったものを選択し、自分で使いやすく工夫するが、文献の書誌情報（著者名、書名・論文名、出版年、出版社、出版地、掲載ページなど）を明記しておくこと、そして、特に引用に用いる可能性があるような箇所は、要点を箇条書きにしたりそのままメモしたりする際に該当ページを必ず把握しておくことが最低限必要である。また、文献を読み進めていくのと同時に文献リストの形に整理していくと、執筆時の労力が大きく軽減される。なお、インターネット上の資料であれば、URL、アクセス日、資料名、出版年、資料の作成者を明記しておく。

課題 4.1 : 自分のテーマに関する先行研究を探すにあたり、自分の論文のテーマからキーワードを 5 つ程度、日本語と英語（または研究対象言語）で列挙してみよう。（例：母音の無声化 vowel devoicing、異形態 allomorph、人称代名詞 personal pronoun、倒置 inversion、母語干渉 mother tongue interference、△△方言 ... dialect、…）

1.

2.

3.

4.

5.

課題 4.2 : 課題 4.1 で列挙したキーワードの 1 つを選んで (または 2 つを組み合わせで) 先行研究を探してみよう。和書の書籍、和書の研究論文、洋書の書籍、洋書の研究論文をそれぞれ適切な WEB ツールを使って探そう。見つけた先行研究の書誌情報 (著者名・書籍名・論文名・出版社・出版地・発行年・号数・ページ数など) のリストを作成しよう。

課題 5 : 先行研究から引用対象となる部分を抜粋または要約し、引用箇所のメモ（著者・発行年、引用ページ数）を添えよう。



### 3. 文献以外のデータ収集

データの収集方法は様々あるが、ここでは言語研究を行うにあたって最も一般的なコーパス、質問紙（アンケート）、面接調査（インタビュー）を紹介する。また調査倫理の面にもふれる。

#### a. コーパス

##### 英語

- Brown Corpus、1961 年以來継続して英語では最も歴史のあるデータソース。  
<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/BROWN/>
- The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus (LOB Corpus) Brown Corpus のイギリス英語版。  
<http://www.helsinki.fi/varieng/CoRD/corpora/LOB/index.html>
- International Corpus of English、Greenbaum によって創設された国際語としての英語のコーパス。  
<http://www.ucl.ac.uk/english-usage/projects/ice.htm>
- 外国語習得の研究では学習者の言語が関心の対象となるが、次の 2 つの学習者コーパスは有益な情報源。
  - Cambridge Learner Corpus – [https://www.cambridge.org/elt/corpus/learner\\_corpus.htm](https://www.cambridge.org/elt/corpus/learner_corpus.htm)
  - UCLouvain Learner Corpora around the world – <https://uclouvain.be/en/research-institutes/ilc/cecl/learner-corpora-around-the-world.html>

##### ドイツ語

- ドイツ語研究所 (Institut für Deutsche Sprache) による COSMAS II が書かれたことばを中心とした代表的なコーパス。
- さまざまなコーパスのまとめサイトとして便利なのが CLARIN-D の次のサイト。<https://www.clarin-d.net/de/sprachressourcen-und-dienste/korpora>
- その他、日本のドイツ語学習のために作成されたものとして、ドイツ語の例文と日本語訳からなるドイツ語例文パラレルコーパス DJPD がある。<http://www.vu.hiroshima-u.ac.jp/deutsch/>

##### フランス語

- CEFC (Corpus d'Etude pour le Français Contemporain), projet ORFEO : このコーパスは話し言葉と書き言葉の両方から構成され、どちらかのみについて検索することも可能。話し言葉のコーパスは、ベルギーやスイスのフランス語も含む。  
<https://repository.ortolang.fr/api/content/cefc-orfeo/11/documentation/site-orfeo/index.html>
- CFPQ : ケベックのフランス語に関するコーパス。  
<https://applis.flsh.usherbrooke.ca/cfpq/index.php/site/index>
- CLAPI (Corpus de L'Angue Parlée en Interaction) : 録音・録画された実際の会話のコーパス集。Téléchargement libre と記載されているものはダウンロード可能。書き起こしが付いている会話もある。<http://clapi.ish-lyon.cnrs.fr/>
- ESLO: 話し言葉のコーパス。<http://eslo.huma-num.fr/>

- Frantext : 10 世紀から 21 世紀にいたるフランス語文献のデータベース。使い方の説明が以下のサイトに載っている。 <https://www.lib.sophia.ac.jp/media/htm/frantext.html>
- Gallica : フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France, BnF)の電子図書館。500 万点近くの資料 (書籍、雑誌、地図、楽譜、イラスト等) を検索できる。iPhone や Android 用のアプリもある。 <http://gallica.bnf.fr/accueil/?mode=desktop>
- Jibiki : 日仏の二言語コーパス。 <https://jibiki.fr/cgi-bin/corpus/corpus.pl?lang=fra>
- Scientext : 学術フランス語のコーパス。Scienquest を使って学術テキストの分析が可能。 [https://corpora.aiakide.net/scientext20/?corpus=sqCorpus\\_sctexts-fr\\_\\_sctexts-fr&do=SQ.setCorpus&view=texts&reload=1](https://corpora.aiakide.net/scientext20/?corpus=sqCorpus_sctexts-fr__sctexts-fr&do=SQ.setCorpus&view=texts&reload=1)
- TLFi : 1971 年から 1994 年の間に 16 巻にわたって出版された仏仏辞書 Trésor de la Langue Française の無料電子版。 <http://atilf.atilf.fr/>
- Tradooit : 英語、フランス語、スペイン語を対象とした多言語コーパス。 <https://www.tradooit.com/index.php>
- Wortschatz (Français) : サイトはドイツ語で書かれているが、フランス語のコーパスもある。 [http://corpora.uni-leipzig.de/de?corpusId=fra\\_mixed\\_2012](http://corpora.uni-leipzig.de/de?corpusId=fra_mixed_2012)

## イスパニア語

- CREA (Corpus de Referencia del Español Actual) : 1974 年～2004 年のスペイン語を集めたコーパス。媒体、国、ジャンルなどで検索可。
- CORPES XXI (Corpus del Español del Siglo XXI) : 2001 年以降のスペイン語を集めたコーパス。媒体、国、ジャンルなどで検索可。
- CORDE (Corpus Diacrónico del Español) : 中世スペイン語～1974 年のスペイン語を集めた、スペイン語の歴史の変遷の研究に最適なコーパス。媒体、国、ジャンルなどで検索可。
- esTenTen : ウェブコーパス Sketch Engine のスペイン語版。出現頻度数やコンコーダンス機能だけでなく、同義語・類義語のシソーラス情報や、語の文法関係とコロケーション情報を検索する機能も。

## ロシア語

- ロシア語ナショナルコーパス(Национальный корпус русского языка) : ロシアの国家プロジェクトで誕生したロシア語の電子コーパス。2022 年 1 月現在、サイトが旧版から新版への移行期間にあり、今後は新版のみが運営される予定。メインとなる書き言葉コーパスだけでも収録語数は 2800 万センテンス、3 億語以上の語数を誇る均衡コーパス。書き言葉コーパスの他にも新聞コーパスや口語コーパスなどがある。コーパス全体では 10 億語以上を収録している。 <http://www.ruscorpora.ru/new>
- ruTenTen11 : 有料の Web コーパスである Sketch Engine で利用可能なロシア語のコーパス。2022 年 1 月現在で 10 億センテンス、145 億語以上の総語数を誇るモニターコーパス。word list やシソーラス機能などの機能を利用することができる。 [sketchengine.eu](http://sketchengine.eu) からアクセスする。

- オープンコーポラ (Open Corpora; Открытый корпус) : 登録型の公開ロシア語コーパス。利用開始には登録が必要。2022年1月現在で10万センテンス、200万語(トークン)とまだまだ規模は小さいが、今後拡大する可能性もある。ロシア語母語話者の参加者が文法情報の曖昧さを除去する作業を行っている。<http://opencorpora.org/>
- (ロシア版) 青空文庫(Библиотека Максима Мошкова; lib.ru) : 散文・韻文のあらゆるジャンルの文学作品のテキストデータがダウンロード可能な状態になっている。外国文学のロシア語訳もある。<http://lib.ru/>

## ポルトガル語

- O *Corpus do Português* : 15世紀~20世紀のポルトガルのポルトガル語及びブラジルのポルトガル語のデータを集めた通時コーパス。<https://www.corpusdoportugues.org>
- Corpus de Referência do Português Contemporâneo (CRPC) : 現代ポルトガル語のコーパス。ポルトガルのポルトガル語をはじめ、世界のポルトガル語変種のデータを集めている。  
<http://clul.ulisboa.pt/recurso/corpus-de-referencia-do-portugues-contemporaneo>
- Corpus Brasileiro:サンパウロカトリック大学(PUC-SP)が構築した現代ブラジルポルトガル語のコーパス。<http://corpusbrasileiro.pucsp.br/cb/Acesso.html>
- Projeto Norma Linguística Urbana Culta (NURC)- RJ : リオデジャネイロで収集された教養ポルトガル語の音声データを集めている。<https://nurcrj.lettras.ufrrj.br>
- Projeto Norma Linguística Urbana Culta (NURC)-SP : サンパウロで収集された教養ポルトガル語の音声データを集めている。<https://nurc.fflch.usp.br>
- Corpus de Produção Escrita de Aprendentes do Português Língua Segunda (PEAPL2) : コインブラ大学一般応用言語学研究所が構築したコーパス。第二言語としてポルトガル語を学ぶ者のデータを集めている。<https://www.uc.pt/fluc/rcpl2/dados>
- CetemFOLHA : ブラジルの新聞 Folha de São Paulo から収集されたデータを集めたブラジルポルトガル語の新聞コーパス。<https://www.linguateca.pt/cetenfolha/>
- CetemPUBLICO : ポルトガルの新聞 Público から収集されたデータを集めたポルトガルのポルトガル語の新聞コーパス。<https://www.linguateca.pt/CETEMPublico/>

## b. 面接（インタビュー）

質問紙を用いる場合と同じように、面接でデータ収集をする場合も事前の準備が重要です。

面接調査には主に構造化インタビュー（structured interview）と半構造化インタビュー（semi-structured interview）があります。構造化インタビューは、用意した質問を順番や表現を変えずに実施するもので、定量的調査や複数で手分けしてインタビューを行う場合に向いています。一方、半構造化インタビューでは質問項目のリストを用意しますが、インタビューの展開に応じて内容を深める質問を加えるなど、柔軟に対応することができ、その点で定性的研究に向いていると言えます。

最も一般的な方法は調査者と調査対象者との間で一対一で行う対面式の面接ですが、複数を対象に一齐に行うこともあります。例えば、授業の効果を調査する場合などは、授業の直後に出席した学習者全員に一齐に聞き取り調査を行うことも必要となることがあります。対象者が遠方にいる場合などはメール、電話、オンライン等で面接を実施しなければならないこともあります。面接本番に先だって、質問の内容をメール等で伝えることにより、相手に回答を準備する余裕を与えることができ、信頼性の高い情報を得る可能性が高くなります。

相手の発言に耳を傾けつつ上手に面接をするのは易しいことではありません。友人を相手にするなどして十分に練習をしておきましょう。本番の面接では録音しておくことで面接後に確認をすることができます。相手の許可を得る必要があることは言うまでもありません。データ分析にあたっては、必要に応じて文字起しをすることが必要になりますが、録音しておくことで可能となります。テーマが発話の内容を対象としているのならば、面談の際に内容を箇条書きにする程度で済むでしょう。（メモをとることについても相手の許可が必要です。）しかし、発話の言語的な特徴が対象ならば一語一語、あるいは音声の特徴なども正確に厳密に記述しなければならず、やはり録音をすることが重要な要件になります。

私たちの研究すべてにわたって言えることですが、目的を 100%達成するために何を犠牲にしてもよいということはありません。研究の成果を社会に還元する責務が私たちにはありますが、研究に協力をして下さる方々にとっても、研究に参加することが何らかの学びの機会となるように最大限の配慮をすることが求められます。情報を提供して頂くにあたっては相手の方の意思が尊重されなければならず、面接（インタビュー）も例外ではありません。

課題6：テーマをさらに明確にするために、友人を対象に20分程度の面接の練習を試みよう。中心となる問いを3つ、時間があれば質問してみたい問いをいくつか準備する。応答はメモを取っておくこと。

### c. 質問紙（アンケート）

質問紙（アンケート）の作成には予想以上の時間がかかります。少数の人に答えてもらい、合わせてコメントをもらい改訂を繰り返す、つまりパイロット・テストを繰り返すことが必要です。そのためには事前に内容をよく練っておくことが重要であることは言うまでもありません。その際、以下のような点に特に配慮する必要があります。（詳しくは巻末の参考文献を参照のこと。）

- ・ 長さ：回答する立場になってみれば分かるが、質問紙が長いと敬遠される。長さの目安としては4ページ以内、回答時間としては20分以内が適当である。
- ・ レイアウト：見やすい構成になっていると、それだけで回答する側の気持ちがちがう。そのためには適度な行数に設定し、フォントは11~12ポイント、和文はMS明朝、欧文はTimes New Romanを推奨する。また、設問に番号を振る、1つの質問が2ページにまたがらないようにする、「裏へ続く」といった指示文を入れる、といった配慮も必要である。
- ・ 守秘義務の履行：集めたデータを誰がどのような目的で使用するのかを明確に伝える。例「このアンケートでは守秘義務の履行を約束します。回答内容について、個人を特定できるような情報が開示されることはありません」。また、回収したデータを処理する際に、個人情報の取り扱いに注意する。
- ・ 設問の指示文：回答の方法を明確に指示する。選択肢を○で囲むのか、番号を振って順位をつけるのか、などの指示を分かりやすく記載する。また、質問紙のページが変わるごとに指示文を載せておく。
- ・ スケール（リッカート・スケール、Likert scale）を使用する場合：5段階のスケールが多いが、自分のデータ収集には何段階のスケールが適当かをよく考える。また、機械的な回答を防ぐために、肯定的な極と否定的な極を左右交互にすることも考えられる。
- ・ 自由記述式は最後に：選択式と自由記述式の問題を併用する場合は、できるだけ自由記述式の問題を最後に置く。ただし、自由記述式の質問は敬遠されるので、調査に必要な情報であることを強調し、記述してもらえるように工夫をする。

また、質問紙ではなく Google フォームを使用したアンケートもあります。回答結果が自動で集計され、グラフで可視化できる等のメリットがあります。SNS を使って短時間で拡散させやすいものの、対面で質問紙を配布した場合に比べて回答率が低いこともありますから注意が必要です。Google フォームでの回答を依頼する際、知人や友人一人一人に宛ててメールやメッセージを送り、ひとこと言葉を添えるほうが効果的です。

課題 7 : 課題 6 で収集した面接データを整理して、質問紙の項目をつくってみよう。自由回答形式でもよいし、リッカート・スケールを使ってもよい。

#### d. 人を対象とした調査の倫理について

上述したとおりアンケート、面接調査のように人を対象とした調査では、参加者が被害を被らないよう研究上の倫理に十分配慮することが必要です。少なくとも以下の点について事前に確認しておきましょう。

1. 面接対象者にインフォームド・コンセント—目的を説明した上での了承—を得ておくこと。
2. インフォームド・コンセントはできれば書面で得ておくこと。口頭だと後々記憶があいまいになってしまうことがある。
3. インフォームド・コンセントには結果の処理の仕方（統計的処理を施す等）、データの使用目的（授業の課題として提出する、卒業論文に使う等々）を合わせて記載すること。
4. 発表にあたっては個人の名前が特定されることはないこと（anonymity）、すべての情報について秘匿の義務を守り内容がそのまま外部に公表されることはないこと（confidentiality）、結果から個人が特定されることはないこと（non-identifiability）を確認すること。
5. 面接を受けることによって面接対象者自身の外国語学習の振り返りの機会になる、有益なアドバイスが得られる等、面接調査自体が面接対象者の利益につながるものであることが望ましい。さらに、調査の結果が得られ次第報告書を送ることによって参加協力者の利益に資することができる。

以上を考慮した上で、各自指導教員と相談してください。



## C アウトラインの作成と肉付け

アウトラインは絵画で言えば、デッサン、建築で言えば設計図のようなものです。論文全体の輪郭をつかむことにより執筆のより適切な順番や、あるいは執筆するにあたって欠落している論旨の箇所を発見することもできます。文献や資料、データを読みながらアウトラインをチェックし、アウトラインを横に置きながら、執筆に取り掛かるのが理想的です。アウトラインの作成にあたっては以下の点に注意しましょう。

- ・ 自分の問題意識、思考過程を明確にするために、実際に書き始める前に、早い段階で作成に着手する。
- ・ 一度作成したらそのままにせず、資料の読破、ノートの作成、分析に応じて随時手を加えて内容を豊かにする。執筆途中でも新しいアイデアが生じて一部手直しをしたくなる場合もでてくるから柔軟に対処したいものである。
- ・ 章、節、項だてをし、なるべく詳細なアウトラインの作成を心掛ける。例えば、章は、I II III、節は、1. 2. 3. 項は、(1)、(2)、(3)、さらにその下は1) 、2) 、3) で表記するなど、こうすることによって、論理過程の問題点、知識や情報、データの不足を事前に知ることができ、しかも文章の執筆が格段に楽になる。
- ・ 一度完成したアウトラインでも、資料の読破、分析結果によっては、思い切ってやり直す勇気が必要である。

### 1. 論文の構成

基本は、序論(このほか「はじめに」、「序」、「プロローグ」などが使われる)、本論、結論（「おわりに」、「むすび」、「まとめ」、「エピローグ」なども使われる）が3本柱となります。執筆に慣れれば、若干のバリエーションも可能となりますが、まずはこの3本柱の原則を守って書き始めましょう。

**序論**では、レポート・論文で展開したい自分の問題意識や課題、仮説を提起します。特に卒業論文のような大きな論文の場合には、本論の構成を説明し、論考の進め方や用いる方法論、当該研究分野における研究状況を付け加えることが必要となります。特に冒頭の書き出しには注意を払い読み手の関心を引き付けることができるよう配慮しましょう。読者を意識して書くことが、自分の書きたいものは何か、ということをはっきりさせることにもつながります。

**本論**はレポート・論文の本体部分にあたる。序論で提起した問題に即して、データ・資料などにもとづき記述し分析をおこないながら、自分が提起した問題をあたかも積み木を積み上げていくように

論旨を整理して、説明したり証明したりしていくところに、レポート・論文作成の最大の意義があります。またその作成を通じて論理を組み立てる訓練が、将来、実社会のあらゆる部分で必要とされる実力を養成することにもつながります。序論と結論にはそれぞれ1章を当てるが、本論は1章とは限らず、2章以上になるのが普通です。

**結論**では最初に設定した主題に戻り、本論での分析や説明、論旨の展開から導かれる結論を書く。そのために必要であれば全体のまとめを書き加える作業も必要となります。この時点では十分展開できなかった今後の課題を付記することもあります。ただし、新しい議論を展開することはしません。

## 2. 論文のスタイル

論文の構成や見出しのつけ方については、MLA、APA等々さまざまな学術団体での規定があります。どの規定に従うかは指導教員と十分に相談して進めてください。いずれにせよ、論文全体で一貫した記載方法であることが最も大切です。次頁に参考までに代表的な例を挙げます。

## 論文の構成例

### 論述型の場合

#### 論文のタイトル

#### 執筆者名

#### 序論（序章）

テーマを提示して、なぜそのテーマをとりあげるのか、意義を説明し、先行研究をふまえて問い（主問）を立てる。論じる範囲を明確にし、何をどのようにどこまで明らかにするかを示す。また本論の構成を説明する。分量の目安：全体の1割程度。

#### 本論（複数の章）

章ごとに小問（副問）を設定してそれに答えていく。そのことをとおして、本論文全体の問い（主問）への答えが導き出される。分量の目安：全体の8割程度。

#### 結論（終章）

議論の流れを確認して本論の内容を要約し、本論での議論から導き出される結論を述べる。また本論で論じ残された点や今後の課題を述べる。分量の目安：全体の1割程度。

注意：ここで新たな論拠提示や議論展開をしない。

**論文例** ※章内の節は一般性のある序章のみ示し、本論（2～4章）の節は省略している

#### ドイツの移民政策における統合コースの役割

ドイツ語要旨

目次

#### 1. 序章

##### 1.1 研究の背景・目的

##### 1.2 先行研究

##### 1.3 本研究の問いと手順

#### 2. ドイツ政治における統合政策の変遷

#### 3. 統合コースの構成と内容

#### 4. 実地調査：統合コースの実態—A市の例から

#### 5. まとめと考察

##### 5.1 結論

##### 5.2 今後の課題

参考文献

## 実証研究（データ分析型）の場合

### 論文のタイトル

### 執筆者名

### 抄録 Abstract

300 から 400 文字程度で内容のまとめを書く。必要十分な情報を簡潔に要約すること。

### 序論 Introduction

テーマを研究するに至った経緯、意義、論文の概略などを分かりやすく書く。ゼミ論等比較的短めの論文の場合には、次の文献研究 Literature review を含めてもよい。

### 文献研究 Literature Review

これまでに同分野で行われてきた研究をまとめる。

### 研究課題・仮説 Research questions, hypothesis

研究で解決したい課題を説明する。可能ならば予測される結果を仮説あるいは予測として記載する。

### 方法 Methodology

調査の方法、手順を詳述する。見出しは課題によって適宜変更すること。

### 参加者 Participants

### 研究に使った道具 Instruments

### データ収集・分析方法 Data collection and analysis

### 結果と考察 Results and Discussion

図表等を効果的に使いながらデータ分析の結果を客観的に報告する。結果の解釈を、研究課題に従って論じる。

### 本研究の限界と今後の課題・教育的示唆 Limitations・Educational implications

本研究で実施すべきだったができなかった事柄を記載する。あわせて本研究から得られる示唆を書く。書くべき内容があまりなければ結論にまとめて書く。

### 結論 Conclusion

本研究全体をまとめる。直前の研究の限界、課題、示唆等が短い場合は、結論に含めてよい。

### 注 Notes

本編中で注釈が必要な場合は、ここにまとめる。使いすぎないこと。

### 参考文献 References

本編で引用した文献を規定の書式に従って記載する。

課題 8 : 課題 2 で挙げたテーマについて、アウトラインを作ってみよう。

①まずは構成の大枠を作ってみよう。序論と結論にあたる章は別にして、本論で扱うであろう内容をイメージしながら、全体として何章構成が適切かを考えよう。

課題 8 : アウトライン (続)

②次に、それぞれの「章」で扱う内容を思いつくまま箇条書きにしてみよう。

課題 8 : アウトライン (続)

③②で挙げた項目を系統の同じグループごとにまとめてみよう。

課題 8 : アウトライン (続)

④③でまとめたグループを、議論の流れをイメージしながら「節」として整理し、各章における節の構成を作ってみよう。節の中に下位区分の「項」を設けておいてもよい。



## D 論文の執筆と注の作成

### 1. 最初から最後まで書き続ける

論文などのある程度まとまった文章を書く際には、絶えず書き続けるという心構えが必要である。研究誌等に掲載されている論文を見ると、構成がしっかりしているのであたかも序論から書き始めて、最後に結論を書くまで順に書き進めたという印象を受けるかもしれない。しかしそれは誤解である。印刷物になるまでには再三再四校正を繰り返し、さらに文中の言葉遣いだけではなく全体の構成を組み直すことすら珍しくない。データを分析して結果をだしてから書き始めるというのでは、提出期限に間に合わなくなる可能性が高い。かりに、提出期限に間に合ったとしても、見直す時間がなく、間違いの多い不本意な提出物になりがちである。「書く」という具体的な行為によって、考えていた時には思いもよらなかったアイデアが浮かんできたり、新たな観点からデータを見る必要が生じてきたり、新たな資料が必要であることが分かったりということがある。何かアイデアが浮かんだら書く、指導教員のアドバイスを受けて書き直す、調査対象の特徴を書く、というふうを書くことを習慣化することが必要とされる。

なお、論文やレポートでは、「です・ます」調ではなく、「で・ある」調を用いる。

### 2. 文、パラグラフ、節、章の関係

言うまでもないが、論文は文（センテンス）の集合体です。論文の構造を分解してみると、いくつかの文によってパラグラフが形成され、複数のパラグラフによって節が生まれ、さらに複数の節によって章が構成されていることが分かる。こうした構造は、当然のことながら、論理の展開と密接に関係している。闇雲にペンをとり文章を書き始めても、それはメモでありレポート・論文にはならない。

各パラグラフは、一つの主題を扱う。一つの主題文（トピック・センテンス）と、主題文を根拠づけたり説明したりする複数の支持文からなる。

本文中の節・項などの見出しの番号は、数字とピリオドで示するのが一般的である。

[節] 1.

[項] 1. 1

[項 (小)] 1. 1. 1

### 3. 本編中引用文献の記載

先に、それぞれの学術分野には異なる書き方のフォーマットが規定されていると述べた。これは論文全体の構成だけでなく、文献の引用の仕方や後で述べるように参考文献の記載の仕方にも当てはまる。

他の人が書いたことの参照や引用を行なったら必ず出典を示す必要がある。これを怠ると、他者の意見や言葉をあたかも自分のものであるように述べたことになり、それは剽窃（plagiarism）として捉えられるので、どんなに注意してもしすぎることはない。

通常、日本語の論文内で引用する際は、引用箇所を「」で括り、引用のあとの（ ）内に著者の姓、刊行年、引用ページ番号を記す。たとえば、○○○「○○…」（吉田 2001: 130）とするような方式がある（日本独文学会の場合）。心理学や応用言語学で最も一般的な APA（American Psychological Association）では次のような書き方になる。

……分析には Glaser and Strauss (1967)のグラウンデッド理論を用いた。この理論は定性的分析の方法として広く用いられている（西條、2007）。しかしながら、動機づけ研究については「十分にデータを吟味してから用いるべきである」（山形、2020、p. 140）。

間接引用の場合は、該当文の最後に（ ）をつけて著者名の姓、刊行年、引用箇所の掲載ページを書く。

例：言語管理には三つの種類がある（村岡、2015、p. 10）。

言語管理には三つの種類がある（村岡 2015: 10）。

また、長い引用の場合は引用符を用いず、本文との間を上下 1 行ずつ、左右全角 2 文字分を開けて書くこともある。

例：(本文) 平田(2010: 60)は次のように述べている。

(1 行空ける)

(引用文：2 文字文下げる) ドイツ社会では、人々は概して高い水準の教育を受けているといえよう。

(1 行空ける)

(本文の続き) このように、平田によれば、……

欧文の論文の場合も、基本的に上記と同様である。いずれも、引用された書物は本文末の参考文献リストに記載する。

なお、欧文の引用符は、言語や分野によって異なる。

- ・ **APA** では、“.....” (double quotation marks) で囲む。その中で引用されている場合は、‘...’ (single quotation marks) で囲む。
- ・ **ドイツ語**では、„ ”で引用部を囲む。引用符の中に引用符を使う場合は、, ‘を使う。  
例：○○○,,○○...“ (Duden 2008: 250)
- ・ **フランス語**では、まず« »を使い、その中にも引用符を使う場合は“ ”を使う。
- ・ **イスパニア語**では、まず« »を使い、その中にも引用符を使う場合は、まず“ ”、さらにその中では ‘ ’を使うことが推奨されている。
- ・ **ロシア語**では、まず « » を使い、その中にも引用符を使う場合は „ ” を使う。引用符は一般的に кавычки と呼ぶが、特に« »を指して ёлочки、„ ”を指して лапки とも呼ぶ。
- ・ **ポルトガル語**ではまず、” ”(aspas duplas)を用いる。その内部にも引用符が必要な場合に ‘ ’(aspas simples)が用いられる。

詳細は指導教員の指示を受けること。

課題 9 : 自分が書きたい分野の、日本語や英語、また自分ができる言語（専攻語など）の書籍や論文を見て、直接引用、間接引用がどのような形式でなされているかを確認して、その自分が書くうえで参考になりそうな引用の仕方を抜き出してみよう。

#### 4. 注について

本文に入れるほどではないが、場合によっては参考になりそうな情報を注に入れることができる。ただし、調べた事柄を何でも「おまけ」のように注に入れるのは望ましくない。注があれば、読者はそれを読むために一度本文から外れるわけで、それはかなりめんどろなことであるから、それに値する情報のみを注に入れるようにしよう。注には上付きの通し番号をつける。注番号は、APA などでは、句読点の前につけるが、注が文全体にかかる場合、句読点などの後に注番号をつける方式もある。詳細は指導教員に相談すること。注には脚注と後注の2種類があるが、どちらも Word の機能で簡単に作成できる。

例：○○○<sup>1)</sup>      ○○○とする<sup>2)</sup>。      あるいは      ○○○とする。<sup>2)</sup>

#### 5. 図表について

ことばの説明だけでは読者に伝わりにくい複雑な内容などは適宜図（Figure）や表（Table）を使用するのが効果的です。読者の理解を助けるのが目的ですから、専門誌の例等を参考にしながら読者に伝わりやすい作図、作表に心がけましょう。特に以下の点に留意してください。

- 必要な場合、すなわち読者の理解の助けになる限りにおいて図表を使うこと。
- 図表には番号を振り、全体を表す分かりやすいタイトルをつけること。
- 行・列に見出しをつけること。省略語などを使う場合には図表の下に脚注で示すこと。
- 図表を使うのは読者の理解を助けるための補助的手段なので、本文中で必ず解説をすること。そのため、図表は本文の解説の近くに配置すること。

英語の図表の場合の例を次頁に示します。

## 表 Table の例

### 表#・Table #

#### Summary of Course Evaluation

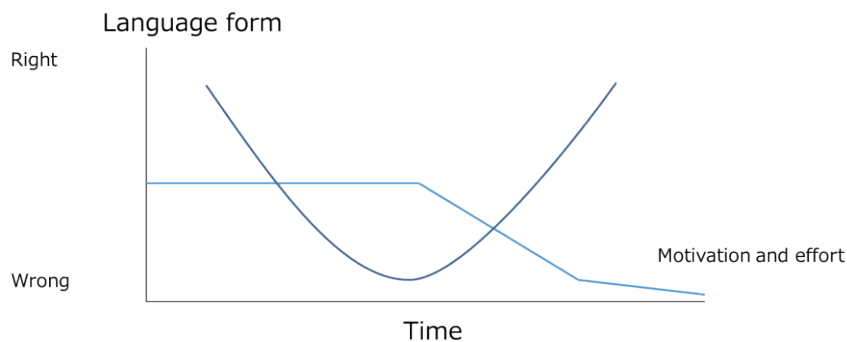
Items	1		2		3		4	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1. The speaker spoke at an appropriate pace.	3.8	1.2	4.0	1.3	3.7	1.0	3.8	1.2
2. The number of pauses in the lecture was appropriate.	3.7	1.2	3.7	1.2	3.7	1.2	3.7	1.2
3. The length of each pause was appropriate.	4.3	0.8	4.3	0.8	4.3	0.8	4.3	0.8
4. Pauses helped me to take more notes.	4.5	0.8	4.2	1.0	4.2	1.0	4.2	1.0

*Note.* Ratings are measured on a scale of 1-5. 5 = Strongly agree; 4 = Agree; 3 = Neither agree nor disagree; 2 = Disagree; 1 = Strongly disagree; 0 = I don't know

## 図 Figure の例

### 図##・Figure ##

Visual representation of the relationship between U-shaped learning curve and motivation/effort



### 留意点

- 図や表には番号（上の例で # で示した箇所）を付けること。
- 図や表にはわかりやすい見出しを付けること。
- 図や表で使った省略語には脚注を付すこと。

課題 10 : 自分が書きたい分野の、日本語や英語、また自分ができる言語（専攻語など）の書籍や論文を見て、自分が書こうと参考になりそうな図を抜き出してみよう。

## E 目次と文献目録の作成

目次を作成するには、著者自身が論文の構成を理解するため、そして読者が全体の構成を見通し理解を助けるため、この2つの目的があります。前者の目的はむしろCの節で解説したアウトラインに近い意味があります。しかし、最初から目次を作成することを念頭に置いてアウトラインを作成することにより、研究計画と論文の構成を同時に進めることができ、多くの利点があります。またアウトラインを兼ねた目次は、進み具合に応じて改訂を重ねながら、ゆくゆくは読者用の目次になるわけですから、ともかく論文作成の早い段階で暫定的にでも作成しておきたいものです。Wordの機能を使うと簡単に作成することができます。そのためには「アウトライン表示」で見出しを作っておく必要があります。

### 1. 文献目録はなぜ必要か

レポートや卒業論文を執筆する際に多くの文献を参考にしますが、それらの文献を論文の最後に明示する必要があります。参考文献、引用文献、References, Bibliography等々の見出しで、レポート・論文の執筆にあたって利用した論文、著書、ネット上の情報すべてを記載した目録である。原則として、読んで参考にした資料ではなく、本文に引用したり参照したりした文献をリストするが、分野によっては異なる方針をとっていることもあるので指導教員と相談の上作成しよう。

参考文献の内容は研究分野によって異なるが、分野にかかわらず次の情報は必須である。

- 書籍の場合：著者の氏名、刊行年、表題、出版社
- 雑誌論文の場合：著者の氏名、刊行年、表題、雑誌名、号数、ページ番号
- 同じ著者が同じ年に複数の文献を刊行している場合は、2017a、2017bと刊行年のあとに小文字のアルファベットを付けて区別する。

さらにインターネット上で参照した資料も掲載しなければならない。正確な書誌情報は、読者があ  
る文献に興味を持った場合にそれを図書館等で入手する際の助けになる。タイトルだけでは、その文  
献を特定することが難しい場合もあり、次に述べるような情報をすべて記載するのがルールである。ま  
た、参考文献の一覧を見れば、筆者がどのような過去の研究をベースに議論を進めてきたのかが一  
目瞭然である。提出前には論文で言及あるいは引用した参考文献がすべて載っているかに注意して  
読み直そう。



## 2. 文献目録の例

以下、代表的な数例を示す。なお、単行本、専門誌掲載論文等々で記載の仕方が異なるが、例では以下の区分に従う。

- 単行本：1人あるいは複数の執筆者による著書あるいは編著書
- 論文（専門誌）：1人あるいは複数の執筆者による論文で専門誌に掲載されているもの
- 論文（単行本・予稿集）：論文集に掲載された論文
- 論文・単行本（Web）：ネット上で出版された著書あるいは論文

## APA (American Psychological Association)

APA のフォーマットは応用言語学、言語教育関係の専門誌の多くが採用している。*JALT Journal* には英文と和文の論文が掲載されておりバックナンバーもネット上 (<http://jalt-publications.org/jj/>) で閲覧可能。

### 単行本

- 田島 薫 (2001) . 『授業改善のための授業分析の手順と考え方』. 黎明書房.
- ドルニエイ,Z. (著) . 米山朝二・関昭典 (訳) (2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』. 大修館書店.
- 日本教育方法学会 (編) (2009) . 『日本の授業研究 (上) (下)』. 学文舎.
- 日比 裕・的場正美 (1999) . 『授業分析の方法と課題』. 黎明書房.
- Fanselow, J. F. (1977). *Breaking rules: Generating and exploring alternatives in language teaching*. Longman.
- Good, T. L., & Brophy, J. E. (2008). *Looking in classrooms, tenth edition*. Allyn and Bacon.
- Letheridge, S., & Cannon, C. R. (Eds.). (1980). *Bilingual education: Teaching English as a second language*. Praeger.

### 論文 (専門誌)

- 齋藤貴弘(2016). 「学校教育における定期テストに関する研究の動向」, 『教育ネットワークセンター年報』、16, 55-66.
- 松原茂樹, 加藤芳秀, 江川誠二 (2008). 「英文作成支援ツールとしての用例文 検索システム ESCORT」, 『情報管理』、51 (7), pp. 251 – 259.
- Moskowitz, G. (1971). Interaction analysis: A new modern language for supervisor. *Foreign Language Annals*, 5 (2), pp. 211 – 221.

### 論文（単行本・予稿集）

成田真澄（2004）．「コーパスに基づく第二言語習得研究」．小池生夫（編集主幹）、『第二言語習得研究の現在』（pp. 315 – 334）．大修館書店．

Swain, M. (1985). Communicative Competence: Some roles of Comprehensible Input and Comprehensible Output in its Development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235 – 253). Cambridge University Press.

### 論文・単行本（Web）

大浦真（2009）．「参考文献の書き方」[https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/2009gakuseisien/researchinfo/paper\\_writing/ohura/references.pdf](https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/2009gakuseisien/researchinfo/paper_writing/ohura/references.pdf)（閲覧日：2020年2月2日）

Fredrickson, B. L. (2000, March 7). Cultivating positive emotions to optimize health and well-being. *Prevention & Treatment*, 3, Article 0001a. Retrieved November 20, 2000, from <http://journals.apa.org/prevention/volume3/pre0030001a.html>

## ドイツ語

ドイツ語学・ドイツ研究の関連分野でよく用いられる書き方を日本語、ドイツ語の文献について記します。日本独文学会の方式を参考にしています。同じ著者の複数の文献をあげるときは、発行順に並べます。同じ年に複数ある場合は、2019a, 2019b のように区別します。

ドイツ語での論文の執筆にあたっては日本独文学会 H P (Zeitschrift) の執筆要領 (Bestimmungen zur Manuskriptformatierung) も参考にすること : <http://www.jgg.jp/>

### 単行本

**日本語：著者名（出版年）『書名』出版社名。**

例： 望田幸男・三宅正樹(1997)『概説ドイツ史（新版）』有斐閣。

**ドイツ語：著者名（出版年）：書名. 出版地: 出版社名.**

例： Faber, Anne (2005): *Europäische Integration und politikwissenschaftliche Theoriebildung*. Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.

### 論文（専門誌）

**日本語：著者名（出版年）「論文名」『雑誌名』巻号、発行所、掲載ページ。**

例： 有泉泰男（2005）「啓蒙主義から現代に至る「中世」の評価」『ドイツ語研究』第22号、ドイツ語圏文化研究所、21-35頁。

**ドイツ語：著者名（出版年）：論文名. 雑誌名 巻号, 掲載ページ.**

例： Neuner, Gerhard (1994): Aufgaben und Übungsgeschehen im Deutschunterricht. *Fremdsprache Deutsch* 10, 6-13.

### 論文（単行本・予稿集）

**日本語：著者名（出版年）「論文名」編者『書名』出版社名、掲載ページ。**

例： 平高史也(2011)『『第二言語』から見たドイツと日本の言語意識』山下仁・渡辺学・高田博行編『言語意識と社会 ドイツの視点・日本の視点』三元社、113-136頁。  
翻訳書の場合、著者名のあとに、(〇〇訳)と訳者名をいれる。

**ドイツ語：著者名（出版年）：論文名. In: 編者名(Hrsg.),書名, 掲載ページ.**

例： Weydt, Harald (2012): Sprachkonflikte – unvermeidlich aber beherrschbar. In: Barbara Jańczak, Konstanze Jungbluth & Harald Weydt (Hrsg.), *Mehrsprachigkeit aus deutscher Perspektive*, Tübingen: Narr-Verlag, 9-29.

## 論文・単行本（Web）

著者名「ページタイトル」ウェブサイト名<URL>（閲覧日）。

例：久保山亮(2016)「ドイツはなぜ難民を受け入れるのか」難民支援協会  
<<https://www.refugee.or.jp/jar/report/2016/08/26-0000.shtml>>（閲覧日：2020年1月31日）

例：Japanische Gesellschaft für Germanistik, Komitee zur Untersuchung der Lage von Deutschunterricht und Deutschlernenden in Japan (20.5.2013): *Zur Lage von Deutschunterricht und Deutschlernenden in Japan – Untersuchungsbericht 1. Die Bildungsinstitutionen*,  
<[http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content\\_id=347](http://www.jgg.jp/modules/organisation/index.php?content_id=347) |>, Abfrage: 31.01.2020.

新聞記事：著者名「記事名」『新聞名』掲載年月日（朝刊夕刊）、掲載面。

例：木下直子「ドイツの社会」『朝日新聞』2014年10月10日（朝刊）、8面。

## フランス語

ここで紹介する 2 つのスタイルは、日本フランス語学会（タイプ A）と日本フランス語教育学会（タイプ B）の学会誌の表記法を参考にしています。学会や出版社によってスタイルが多少異なりますので、指導教員と相談して決定してください。表記法に一貫性があることが重要です。

### タイプ A

#### 単行本

##### 単著

Kerbrat-Orecchioni, C. (2001), *Les actes de langage dans le discours. Théorie et fonctionnement*, Paris, Nathan.

##### 共著

Amossy, R. & A. Herschberg Pierrot (2004), *Stéréotypes et clichés*, Paris, Nathan.

Zarate, G. et al. (2008), *Précis du plurilinguisme et du pluriculturalisme*, Paris, Editions des archives contemporaines.（著者が 3 人以上の場合、et al.で省略することも可能）

##### 編著

Montandon, A. (ed) (1995), *Dictionnaire raisonné de la politesse et du savoir-vivre*, Paris, Seuil.

Cicurel, F. & D. Véronique (eds) (2002), *Discours, action et appropriation des langues*, Paris, Presses Sorbonne Nouvelle.

#### 論文（専門誌）

##### 単著

Pungier, M.-F. (2007), “Désirs de langues - du côté des étudiants”, *Revue japonaise de didactique du français* 2-1, 196-214.

##### 共著

Tanaka, S. & R. Mogi (2010), “La préparation en ligne des étudiants japonais aux études supérieures en France”, *Le Français dans le monde, Recherches et applications* 47, 84-93.

#### 論文（単行本・予稿集）

Bange, P. (2002), “L’usage de la règle dans l’enseignement”, F. Cicurel, D. Véronique (eds), *Discours, action et appropriation des langues*, Presses Sorbonne Nouvelle, 21-36.

#### 論文・単行本（Web）

Wlosowicz, T. M. (2016), “L’alternance codique entre L2 et L3”, *Recherches en didactique des langues et des cultures* 13-2 <http://journals.openedition.org/rdlc/892> (consulté le 23 janvier 2018).

※タイプ A について詳しくは日本フランス語学会の以下のリンク先を参照のこと。

<http://www.sjlf.org/wp-content/uploads/2010/04/9d30a44186d603b762ff2125d16825cb.pdf>

## タイプ B

### 単行本

#### 単著

Kerbrat-Orecchioni C. (2001). *Les actes de langage dans le discours. Théorie et fonctionnement*. Paris : Nathan.

#### 共著

Amossy R. & Herschberg Pierrot A. (2004). *Stéréotypes et clichés*. Paris : Nathan.

#### 編著

Zarate G. et al. (2008). *Précis du plurilinguisme et du pluriculturalisme*. Paris : Editions des archives contemporaines. (著者が3人以上の場合、et al.で省略することも可能)

Montandon A. (dir.) (1995). *Dictionnaire raisonné de la politesse et du savoir-vivre*. Paris : Seuil.

Cicurel F. & Véronique D. (dir.) (2002). *Discours, action et appropriation des langues*. Paris : Presses Sorbonne Nouvelle.

### 論文 (専門誌)

#### 単著

Pungier M.-F. (2007). Désirs de langues - du côté des étudiants. *Revue japonaise de didactique du français*, 2-1, 196-214.

#### 共著

Tanaka S. & Mogi R. (2010). La préparation en ligne des étudiants japonais aux études supérieures en France. *Le Français dans le monde, Recherches et applications* 47, 84-93.

### 論文 (単行本・予稿集)

Bange P. (2002). L'usage de la règle dans l'enseignement. In Cicurel F. & Véronique D. (dir.), *Discours, action et appropriation des langues*, 21-36. Presses Sorbonne Nouvelle.

### 論文・単行本 (Web)

Wlosowicz T. M. (2016). L'alternance codique entre L2 et L3. *Recherches en didactique des langues et des cultures*, 13-2 <<http://journals.openedition.org/rdlc/892>>, consulté le 23 janvier 2018.

※タイプ B について詳しくは日本フランス語教育学会の以下のリンク先を参照のこと。  
[http://sjdf.org/publication/instructions\\_reglements](http://sjdf.org/publication/instructions_reglements)

## イスパニア語

以下に紹介する2つのスタイルは、より伝統的な *Revista de Filología Española* のもの（タイプ A）と、スペイン言語学会の機関誌である *Revista Española de Lingüística* のもの（タイプ B）です（Web からの場合は統一されていないため一例として挙げてあります）。また、イスパニア語教育研究の分野では、APA が主流です（本冊子 40 ページ参照）。その他、学会や出版社によってスタイルにはバリエーションが見られますので、指導教員と相談して決定してください。

### タイプ A

#### 単行本

##### 単著

Flores Cervantes, Marcela (2002): *Leísmo, laísmo y loísmo. Sus orígenes y evolución*, México, UNAM.

##### 共著

Bosque, Ignacio y Javier Gutiérrez-Rexach (2011): *Fundamentos de sintaxis formal*, Madrid, Akal.

##### 編著

Sáez, Luis y Cristina Sánchez López (eds.)(2014): *Las construcciones comparativas*, Madrid, Visor.

#### 論文（専門誌）

Avellana, Alicia (2013): “El español en contacto con el guaraní: valores aspectuales en el dominio nominal y clausal”, *Revista de Española de Lingüística*, 43, 2, pp. 7-35.

#### 論文（単行本・予稿集）

Brucart, José María (1999): “La elipsis”, en Ignacio Bosque y Violeta Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Vol. 3, Madrid, Espasa, pp. 2787-2863.

#### 論文・単行本（Web）

Matute Martínez, Cristina (2004): *Los sistemas pronominales en español antiguo. Problemas y métodos para una reconstrucción histórica*, Madrid, Universidad Autónoma de Madrid, <[http://www.lllf.uam.es/coser/publicaciones/cristina/1\\_es.pdf](http://www.lllf.uam.es/coser/publicaciones/cristina/1_es.pdf)>.



## タイプ B

### 単行本

#### 単著

Flores Cervantes, M. 2002: *Leísmo, láismo y loísmo. Sus orígenes y evolución*, México, UNAM.

#### 共著

Bosque, I. y Gutiérrez-Rexach, J. 2011: *Fundamentos de sintaxis formal*, Madrid, Akal.

#### 編著

Sáez, L. y Sánchez López, C. (eds.) 2014: *Las construcciones comparativas*, Madrid, Visor.

### 論文 (専門誌)

Avellana, A. 2013: «El español en contacto con el guaraní: valores aspectuales en el dominio nominal y clausal», *Revista de Española de Lingüística* 43, 2, pp. 7-35.

### 論文 (単行本・予稿集)

Brucart, J. M. 1999: «La elipsis», en Bosque, I. y Demonte, V. (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, Vol. 3, Madrid, Espasa, pp. 2787-2863.

### 論文・単行本 (Web)

Matute Martínez, C. 2004: *Los sistemas pronominales en español antiguo. Problemas y métodos para una reconstrucción histórica*, Madrid, Universidad Autónoma de Madrid. Disponible en <[http://www.lllf.uam.es/coser/publicaciones/cristina/1\\_es.pdf](http://www.lllf.uam.es/coser/publicaciones/cristina/1_es.pdf)> (última consulta: 18-06-2010).

## ロシア語

ロシア語の参考文献の書き方には統一ルールが存在していないので、書き方は指導教員の指導を仰ぐことになる。言語学で最も権威のある論文集はロシア科学アカデミー (Российская академия наук) のロシア語研究所が刊行している「Вопросы языкознания」(『言語学の諸問題』、しばしば ВЯ と省略される) なので、その方式を踏襲すれば安全だが、2015 年からラテン・アルファベットの翻字および英訳を併記するようになり煩雑になったので、2014 年以前のスタイルを採用しても良い。

統一ルールは存在しないものの、以下のような概略はほとんどの方式で遵守されている。

- ・ キリル文字の文献とラテン・アルファベットの文献は分けて、それぞれ著者のアルファベット順に挙げる。(和書を挙げるならば、それも分けて著者の 50 音順に挙げる。)
- ・ キリル文字の文献であれば言語は区別しない。ウクライナ語の文献も、ブルガリア語の文献も、著者のアルファベット順に列挙する。ラテン・アルファベットの文献も言語は区別しない。英語文献もチェコ語文献も同列に挙げる。
- ・ 人名は、「姓 фамилия 名前 имя の頭文字. 父称 отчество の頭文字.」の順で表記する。(例 : Михаил Васильевич Ломоносов ならば、Ломоносов М. В.) 姓と名前の頭文字の間には半角スペースを開ける。(名前の頭文字+ピリオドと父称の頭文字+ピリオドの間は半角スペースを開ける場合と開けない場合がある。)
- ・ 人名は 2 名までならばコンマで区切って両者を挙げる。3 名以上の時には「и др.」(他)を使う。
- ・ 同一人物による同一出版年の複数文献は a, б, в... の補助記号を年号の後ろに書いて区別する。(例 : Апресян 2009a)
- ・ 出版地をキリル文字で表記するとき、モスクワは「М.」と、サンクト・ペテルブルクは「СПб.」と、レニングラードは「Л.」と略号で表記する。
- ・ 論文を挙げるときには、「論文名 // 収録文献名」のようにダブルスラッシュ//でその境界を示す。
- ・ ページの記号は「С.」を用いる。
- ・ 書名、論文名共に固有名詞以外は冒頭のみ大文字であとは小文字で表記する。
- ・ 出版地と出版社名の間にはコロン:を打つ。
- ・ Web サイトを参照した場合には、URL と共に最終閲覧日を記載する。後日その Web サイトが閲覧不可能な状態になっても、論文執筆時は閲覧可能だったことの証拠となる。例 :  
[2018 年 12 月 8 日最終閲覧]

## スタイル 1

(Вопросы языкознания; 2015-) (☆2014 年までは[ ]内を省略していた。)

### 単行本

#### 単著

Виноградов 1947/1972 — Виноградов В. В. Русский язык (грамматическое учение о слове). М.: Высшая школа, 1972. [Vinogradov V. V. *Russkii yazyk (grammaticheskoe uchenie o slove)* [The Russian language (grammatic theory of the word)]. Moscow: Vysshaya Shkola, 1972.]

#### 共著

Аванесов, Сидоров 1945 — Аванесов Р. И., Сидоров В. Н. Очерк грамматики русского литературного языка. Часть I: Фонетика и морфология. М.: Учпедгиз, 1945. [Avanesov R. I., Sidorov V. N. *Ocherk grammatiki russkogo literaturnogo yazyka. Chast' I: Fonetika i morfologiya* [An outline of the Russian grammar. Part I: Phonetics and morphology]. Moscow: Uchpedgiz, 1945.]

#### 編著

Бабенко Л. Г. (ред.) Толковый словарь русских глаголов. М.: АСТ-Пресс, 1999. [Babenko L. G. (ed.) *Tolkovyi slovar' russkikh glagolov* [Explanatory dictionary of Russian verbs]. Moscow: AST-Press, 1999.]

РГ 1980 — Русская грамматика: В 2 т. Т. II. / Гл. Ред. Шведова Н. Ю. М.: Наука, 1980. [*Russkaya grammatika* [Russian Grammar]: In 2 vols. Vol. II. Shvedova N. Yu. (ed.). Moscow: Nauka, 1980.]

### 論文 (専門誌・予稿集)

Падучева 1996 — Падучева Е. В. Коммуникативный статус вводных предложений // Падучева Е. В. Семантические исследования. Семантика времени и вида в русском языке. Семантика нарратива. М.: Языки русской культуры, 1996. [Paducheva E. V. Communicative status of parenthetic clauses. Paducheva E. V. *Semanticheskie issledovaniya. Semantika vremeni i vida v russkom yazyke. Semantika narrativa*. Moscow: Yazyki Russkoi Kul'tury, 1996.]

Щерба 1974 — Щерба Л. В. О частях речи в русском языке // Языковая система и речевая деятельность. Л.: Наука, 1974. С. 77—100. [Shcherba L. V. On parts of speech in Russian. *Yazykovaya sistema i rechevaya deyatel'nost'*. Leningrad: Nauka, 1974. Pp. 77—100.]

## 論文・単行本 (Web)

НКРЯ — Национальный корпус русского языка // <http://www.ruscorpora.ru>. [Natsional'nyi korpus russkogo yazyka [Russian National Corpus]. Available at: <http://www.ruscorpora.ru>.]

## ラテン・アルファベット文献 (単行本)

Isačenko 1962 — Isačenko A. V. *Die Russische Sprache der Gegenwart. T. 1: Formenlehre.* Halle: Niemeyer, 1962.

Vendler 1967 — Vendler Z. “Verbs and Times,” *Linguistics in Philosophy* (Ithaca, N.Y.: Cornell University Press, 1967.

## スタイル 2

(Русский язык в школе) (☆1行目がインデントされている。)

Князев Ю.П. Грамматическая семантика. М., 2007.

Винокур Т.Г. О языке современной драматургии // Языковые процессы современной русской художественной литературы. Проза. — М., 1977.

## スタイル 3

(Русская речь) (☆通し番号を付けて、人名をイタリックで表記している。)

1. *Васильев Н.Л., Жаткин Д.Н.* Словарь поэтического языка Н.М. Карамзина. М., 2016.

2. *Захаров В.Н.* Памятник как текст, или Послание братьев Достоевских // *Неизвестный Достоевский*. 2014. Вып. 1/2. С.6—9.

## ポルトガル語

ポルトガル語学及びポルトガル語教育、またその他の文系分野における参考文献の書き方として、ブラジルでは ABNT (Associação Brasileira de Normas Técnicas = ブラジル技術規格協会) の基準が主流であり、ブラジル以外では APA (American Psychological Association) のスタイルが広く採用されています。以下、ABNT スタイルと APA スタイルの順に例を紹介いたします。学会や出版社によってスタイルが異なるので、指導教員と相談して決定してください。

### ABNT スタイル

※著者名は全て大文字で表記し、出版年は最後に表記します。著者名を複数表記する場合は「;」で区切ります。

#### 単行本

##### 単著

BECHARA, E. *Lições de português pela análise sintática*. 16<sup>a</sup>. ed. Rio de Janeiro: Lucena, 2001.

##### 共著

KOCH, I.G.V.; TRAVAGLIA, L. C. *Texto e coerência*. 7<sup>a</sup>. ed. São Paulo: Cortez, 2000.

HOUAISS, A. et al. *Dicionário Houaiss da língua portuguesa*. 1<sup>a</sup>. Ed. Rio de Janeiro: Objetiva, 2001.

##### 偏著

ARAÚJO, G.A. (org.) *O acento em português: abordagens fonológicas*. São Paulo: Parábola, 2007.

BISOL, L.; SCHWINDT, L.C. (orgs.). *Teoria da otimidade: fonologia*. Campinas: Pontes, 2010.

#### 論文 (専門誌)

GAFFURI, P. ; MENEGASSI, R.J. Análise de atividades de leitura e escrita em língua inglesa em contextos de ensino diferenciados. In: *Revista Querubim*, v.8, n.1, 2009. pp.138-149.

#### 論文 (単行本・予稿集)

AZUAGA, L. Morfologia. In: FARIA, I. H. et al. *Introdução à Linguística Geral Portuguesa*. Lisboa: Caminho, 1996. pp.215-244.

NEVES, J. B. Mediativo e Jornalismo. In: *Actas do XIX Encontro Nacional da Associação Portuguesa de Linguística*. Lisboa: APL, 2003. pp. 615-622.

#### 論文・単行本 (Web)

MENDES, E. A ideia de cultura e sua atualidade para o ensino-aprendizagem de L2/LE. In:

*EntreLínguas*, Araraquara, v. 1, n. 2, jul./dez. 2015. pp. 203-221. Disponível em:  
< <https://periodicos.fclar.unesp.br/entrelinguas/article/view/8060> >. Acesso em: 03 fev. 2021.

## APA スタイル

※著者名は頭文字だけ大文字で表記し、出版年は著者名の直後に表記します。著者名を複数表記する場合は「&」で区切ります。

### 単行本

#### 単著

Bechara, E. (2001). *Lições de português pela análise sintática*. 16. ed. Rio de Janeiro: Lucena.

#### 共著

Koch, I.G.V., & Travaglia, L. C. (2000). *Texto e coerência*. 7. ed. São Paulo: Cortez.

Houaiss, A. et al. (2001) *Dicionário Houaiss da língua portuguesa*. 1.ed. Rio de Janeiro: Objetiva.

#### 偏著

Araújo, G.A. (org.) (2007) *O acento em português: abordagens fonológicas*. São Paulo: Parábola.

Bisol, L., & Schwindt, L.C. (orgs.). (2010) *Teoria da otimidade: fonologia*. Campinas: Pontes.

### 論文 (専門誌)

Gaffuri, P., & Menegassi, R.J. (2009) Análise de atividades de leitura e escrita em língua inglesa em contextos de ensino diferenciados. In: *Revista Querubim*, v.8, n.1, pp.138-149.

### 論文 (単行本・予稿集)

Azuaga, L. (1996) Morfologia. In: FARIA, I. H. et al. *Introdução à Linguística Geral Portuguesa*. Lisboa: Caminho, pp.215-244.

Neves, J. B. (2003) Mediativo e Jornalismo. In: *Actas do XIX Encontro Nacional da Associação Portuguesa de Linguística*. Lisboa:APL, pp. 615-622.

### 論文・単行本 (Web)

Mendes, E. (2015) A ideia de cultura e sua atualidade para o ensino-aprendizagem de L2/LE. In: *EntreLínguas*, Araraquara, v. 1, n. 2, jul./dez. 2015, pp. 203-221. Disponível em:  
< <https://periodicos.fclar.unesp.br/entrelinguas/article/view/8060> >. Acesso em: 03 fev. 2021.



課題 11:パート C で作成したアウトラインに基づいて、目次を作ってみよう。暫定的なものでも構わないので、作成した日付も入れておこう。

[\_\_年\_\_月\_\_日作成]

[\_\_年\_\_月\_\_日改訂]



課題 12: パート B で収集した文献の中から 1 つずつ選び、実際に文献目録を作成してみよう。

日本語

単行本 :

論文 (専門誌) :

論文 (単行本・予稿集) :

論文・単行本 (Web) :

英語

単行本 :

論文 (専門誌) :

論文 (単行本・予稿集) :

論文・単行本 (Web) :

専攻言語

単行本 :

論文 (専門誌) :

論文 (単行本・予稿集) :

論文・単行本 (Web) :

## F 推敲と提出

論文を一通り最後まで書き上げたら、読み直す作業が不可欠です。そのためにも、締め切りの直前に仕上げるのではなく、推敲する時間を取れるように余裕をもった計画を立てたいものです。また、PCの画面等で読み直すよりも、一度印刷して紙の上で作業するほうが全体をみわたして効果的な推敲ができます。読み直す際には最初に内容を確認し、さらに形式を確認してください。以下に確認項目をリストします。見直しの際の参考にしてください。

### 1. 形式の確認事項

#### 全体についてチェックすること

- 1. 指示された形式に合っているか。(ページ数、行数・字数、フォントの種類とサイズ)
- 2. 表紙に記載すべき項目が記載されているか。(タイトル、学生番号、名前、指導教員の氏名やゼミの名称、研究コースの名称など)

#### 文章についてチェックすること

- 3. 誤字や脱字がないか。特に変換ミスに注意。「講読」を「購読」などとしている誤りはないか。
- 4. 用語の使い方が統一されているか。例：「例えば」と漢字にするかあるいは「たとえば」と仮名にするか。
- 5. 一つの段落の長さは適切か。長すぎないか。
- 6. 規定に従って、直接引用、発話等を両括弧で閉じているか。(欧文“...”、和文「」等。)
- 7. 読点「、」の打ち方は適切か。多すぎるといことはないか、少なすぎるといことはないか。
- 8. 敬体(です・ます)と常体(だ・である)が混在していないか。(論文では常体を使う。)

#### 図や表についてチェックすること

- 9. 通し番号が合っているか。本文の番号と合っているか。
- 10. 見出しが付いているか。例：表1 アンケートの基本統計、等々。
- 11. 単位や目盛りを書き忘れていないか。

### 2. 内容の確認事項

- 12. 序論と結論を読んだだけで、論文の全体像が把握できるように書かれているか。
- 13. 問題提起した内容や研究課題(research questions)に対する答えが明示されているか。
- 14. 論文の展開が論理的になされているか。脱線がないか。章と章のつながりがスムーズか。
- 15. 章番号などの記載は正確か。例えば、「～については第4章で論じる」と書いたら、確かに第4章で論じているか。同様に、「～については50ページを参照すること」と書いたら、確かに50ページに記載があるか。

課題 13：提出前の推敲についてリストした 15 の項目のうち、自分自身で最も見逃しがちな事柄はどれだろう。番号を丸で囲むなどして校正の際に特に注意するようにしよう。またリストに上がっていない注意事項はあるだろうか。以下にメモしておこう。

16.

17.

18.

19.

20.

## 研究の倫理

### 1. 剽窃 (plagiarism)

剽窃とは、他人の表現、考えや意見、研究を自分のものとして発表すること、または適切な出典参照や引用を記載しないで論文の一部に記載することです。他人が書いたものを無断で引用することは盗作であり、厳しい処分の対象となります。例えば次のような例が剽窃と認められます。

- 適切な引用や出典表記をせずに、本、論文、インターネットなどから写すこと
- 適切な引用や出典表記をせずに、他人の表現、考えや意見を要約、言い換え、引用すること
- 他人のレポート、論文を入手（購入を含む）して、自分のものとして提出すること
- 他人の表現、考えや意見をレポート、論文、発表等で自分のものとして使用すること

著者が論文中で引用している論文等を自分の論文に引用したい場合には、原則として原典にあたって、引用内容が正しいかどうかを確認することが研究論文では求められています。確認をせずに引用をする「間接引用」、いわゆる孫引きは避けなければなりません。しかし、原典が手に入らない場合などもあります。その際には、原典を引用している論文等を引用文献として本文中に記載しなければなりません。APA スタイルでは例えば次のように記載することとなっています。

… (Krashen, 1993, as cited in Brown, 2020, 頁番号). …

日本語論文では、(Krashen, 1993, Brown, 2020, 22 頁から引用) 等と記載します。

避けなければならないのは、虚偽、つまりあたかも自分で調べたかのように記載することです。そもそも自分の論文を書いているわけですから、直接引用はできるだけ避けて、例えば、「… Brown (2020:22)によると Krashen (1993)は…」、あるいは、「Krashen (1993) は…と報告している (Brown, 2020, p. 22 参照) …」などのように、できる限り自分のことばで要約したり、言い換えたりすることが望ましいのです。

課題 14：論文を書き進めながら、剽窃にあたるかどうかについて迷ったケースはあるだろうか。担当教員に相談する必要がある事柄をここにメモしておこう。

## 2. プライバシーの侵害

私たちの研究分野では、ある言語の使用者や学習者、教員などに協力を求め情報をデータとして扱うことが多々あります。その際に勝手にアンケートを実施してデータを公開したり、面接の結果を公表したりすることは、十分に注意して進める必要があります。個人情報を持定され悪用される危険があるからです。研究にあたって指導教員の指示を受けながら進めることが重要です。本学にも倫理の規定（code of ethics）が整備されていますので、詳細は次の URL を参照してください。  
<https://www.sophia.ac.jp/jpn/research/sunivrsc/kenkyurinri.html>

課題 15：あなたが研究を進める上でプライバシーの侵害に当たるかどうか決めかねた案件はあるだろうか。担当教員に相談する必要のある事柄をここにメモしておこう。

## 要点のまとめ

以上、レポート、小論文、卒業論文等を作成する際の最も基本的な注意事項を書きました。本編でも述べたように、研究分野、目的等によって規定も様々ですので、詳細は担当教員の指導を仰いでください。

- ・ 論文とは何らかの新たな発見を伝えるためのまとまりのある文章である。
- ・ 一編の論文で扱うことのできるテーマは一つである。
- ・ テーマに基づいて、研究課題（research question）を設定する。
- ・ 論文には、論証（argumentation）実証研究（empirical research）の報告等、目的によってさまざまな種類がある。
- ・ 論文は読み手のために書くものである。
- ・ 論文には構成がある。論文の構成は文における文法のような役割を果たす。
- ・ 構成は様々な研究分野によって異なることがある。例えば、文学研究における構成と自然科学における構成は異なる。
- ・ 各研究分野には特定の書式がある。例えば、応用言語学では American Psychological Association (APA)が最も広く用いられている。
- ・ どの研究分野でも、おおよそ序論（introduction）、本編（body）、結論（conclusion）の3つのパートから成る。
- ・ 論文においてこれまでに行われてきた研究を批判的に検討することは非常に重要である。
- ・ 批判的に検討することは、これまでに行われてきた研究をまとめ、学ぶべきところ、足りないところを指摘し、本研究の意義を論じることにつながる。
- ・ 自分の見解と他者の見解を明確に区別する必要がある。そのため、他者の理論や説、データなどを使う場合は、ルールに従って引用文献等を明示する。
- ・ 他人の論文やその他公表された文章から、あたかも自分の書いた文章のように使うことを plagiarism（盗作・剽窃）という。論文では、引用元を示さないコピーは厳禁である。
- ・ 論文の最後には、文中参照した参考文献の目録を付す。これは自らの努力を見せびらかすために行うのではなく、過去の研究があってこそさらに研究をすることができるということに感謝を込める意味もある。
- ・ 論文の構成は書き方の順序を示しているわけではない。序論、本編、結論の順に書くわけではない。

- できるところから書き始めることが重要である。例えば、データを収集し、分析して解釈してから書きはじめるのではなく、データの一部を収集し、分析し、書いてみることにより、今後どのようなデータを集める必要があるのか、どのようなデータ分析の方法が適切なかを理解することができる。
- 何でも書きとめておくことを習慣にする。例えば、テーマを絞り込む場合など、何度も何度も同じことを繰り返し考えてしまうものだ。思考の内容を書きとめておくことにより、無駄を省き建設的に研究を進めることができる。
- 論文執筆にあたっては、草稿を書いたから、コメントを受け、さらに改訂を行う、このプロセスを繰り返す作業でもある。最初から最後まで絶えず書き続けることが重要である。
- 論文には締め切りがある。締め切りを守ることは倫理上大切なだけでなく、時間内に集中して作業をすることにより、いったん作業に区切りをつけ、見直し、新たな作業に移るために利益となるものである。



## 参考文献

※ ここでは、便宜上、執筆者のローマ字表記をつけてあります。体裁は APA に従っています。

- ドルニエイ、ゾルタン (Dörnyei, Z) . (2006). 八島智子・竹内 理 (訳) 『外国語教育学のための質問紙調査入門』 . 松柏社.
- 井下千以子 (Inoshita Chiiko) . (2019). 『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第3版]』. 慶応義塾出版会
- 木下是雄 (Kinosihta Koreo) . (1994) . 『レポートの組み立て方』. 筑摩書房.
- 松本茂 (Matsumoto Shigeru) ・河野哲也 . (2007) . 『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』. 玉川大学出版部.
- 白畑知彦 (Shirahata Tomohiko) ・若林茂則・村野井仁 (2010) . 『詳説 第二言語習得研究—理論から研究法まで』. 研究社.
- 竹内理 (Takeuchi Osamu) ・水本篤 (編著) (2012) . 『外国語教育研究ハンドブッカー 研究手法のより良い理解のために』. 松柏社.
- 浦野研 (Urano Ken) ・亘理陽一・田中武夫・藤田卓郎・高木亜希子・酒井英樹 (2016) . 『はじめての英語教育研究—押さえておきたいコツとポイント』. 研究社.
- American Psychological Association. (2019). *Publication manual of the American psychological association: The official guide to APA style*. (7<sup>th</sup> ed.).
- Brown, J. D. (2001). *Using surveys in language programs*. Cambridge University Press.
- Cohen, L., Manion, L., and Morrison, K. (2011). *Research methods in education, seventh edition*. Routledge.
- Dörnyei, Z., with Taguchi, T. (2010). *Questionnaires in second language research: Construction, administration, and processing, second edition*. Routledge.

### 学内で発行されている参考文献

- 上智大学外国語学部ドイツ語学科 (2010). 『上智大学外国語学部シリーズ 地域研究のすすめ ドイツ語圏編』 . 上智大学外国語学部.
- 上智大学外国語学部アジア文化研究室 (2011). 『上智大学外国語学部シリーズ 新・地域研究のすすめ アジア文化編』 . 上智大学外国語学部.
- 上智大学外国語学部英語学科 (2011). 『上智大学外国語学部シリーズ 新・地域研究のすすめ 英語圏編』 . 上智大学、外国語学部.
- 上智大学外国語学部ポルトガル語学科 (2014). 『上智大学外国語学部シリーズ 第5版』 上智大学外国語学部.
- 上智大学外国語学部イスパニア語学科 (2015). 『上智大学外国語学部シリーズ 地域研究のすすめ スペイン・イスマノアメリカ編』 . 上智大学外国語学部.
- 上智大学外国語学部フランス語学科 (2015). 『上智大学外国語学部シリーズ 新・地域研究のすすめ フランス語圏編』 . 上智大学外国語学部.
- 上智大学外国語学部言語学副専攻・言語研究コース (2017). 『上智大学外国語学部シリーズ 新・言語研究のすすめ (改訂版)』 . 上智大学外国語学部.
- 上智大学外国語学部ロシア語学科 (2018). 『上智大学外国語学部シリーズ 地域研究のすすめ ロシア・ユーラシア編』 . 上智大学外国語学部.

## 執筆者

秋山真一

市之瀬 敦

木村護郎クリストフ

ギボ・ルシーラ

西村君代

原田早苗

渡部良典（代表）

卒論・ゼミ論・レポートのための言語研究論文作成の手引き

---

2019年3月1日 初版発行

2021年3月1日 改訂新版発行

2022年3月1日 改訂版発行

発行者： 上智大学国際言語情報研究所 所内共同研究 論文の書き方執筆班

発行所： 上智大学国際言語情報研究所

© Sophia Linguistic Institute for International Communication, Sophia University  
Printed in Japan

